

ややこしい  
ややこしい

～唐揚げと  
フライドチキン～

芳田尚哉

## 唐揚げとフライドチキン

---

「あっさりがつつりしたもん食いに行くで」

男が唐突に若い男に言った。

「なんですのん、そのあっさりがつつりって。わけわかりませんよ」

「かしわやかしわ。あっさりしとるけど、肉やからがつつりやろ」

「かしわですか。まあ、あっさりっちゃあっさりですわな」

「今日はちょっと洒落てみて、フライドチキンにしようか」

「フライドチキンですか。ええですね」

若い男は唾を飲んだ。

「ほな、これでええな」

二人が来た店は居酒屋だった。チェーン店ではなく、気のいいオヤジさんがいる、二人の行きつけの店だ。昼過ぎから開いているのがいい。呑兵衛にとっての楽園だ。

「この音がええんや」

カウンター越しの厨房からは、じゅわじゅわという油の音と、香ばしい香りが届いてくる。耳と鼻から食欲増進だ。ダイエット中の人には悪魔の音と香りだろう。

「この音と匂いだけでいけるな」

そう言いながら、男は大ジョッキを一気に飲み干す。

「兄さんは、なんもなしでも呑むやないですか」

若い男は呆れながら、ちびちびと口を付ける。

「お前な、もっとぐっといかんかい。一気やろ男やったら」

「なんですのん、その酒を知ったばっかのガキみたいなんわ。大人はじっくりといくもんでしょ」

「それはポンシュとか焼酎や。ビールはぐいっといかんかい。喉越しや喉越し」

そう言いながらお代わりを注文する。向こうもわかったもので\*あうんの呼吸の如く用意されている。

「いっそ、樽でやりたいな。ピッチャーのままってあかんか」

冗談混じりで言うと店のオヤジは、用意しときましょか、とこれまた冗談を返す。

「冗談やのうて、ほんまにそれでもええくらいや」

この人やったら、そのくらいは問題なく呑むやろうな……と若い男は思ったが、口にはしなかった。

ほいよ、と二人の前に皿が出される。

「待とったで。これやこれ」

じゅわじゅわと油がわかるほどのジューシーさ。ぱりっぱりのから揚げが目の前にある。

「ほな食おか」

男はレモンを搾ってかける。

「兄さん、これって……」

「フライドチキンやないか」

やっぱり……と若い男はため息を吐く。

「から揚げやないですか。メニューにもそうありますやん」

ねえ大将——と同意を求める。大将は、まあうちはから揚げっちゅう名前ですな、と答える。

「一緒やないか。から揚げをハイカラに言うたらフライドチキンやないけ」

「違うもんですやん」

「一緒やないけ。かしわを揚げとんねんぞ」

でっしゃろ——と男が大将に同意を求める。大将は、ようわからんけど同じかもしれまへんな、と答える。

「違う料理ですって」

「一緒やないけ。味の違いか？ おんなじから揚げでも、そんなのようけあるで」

「それもあるやろうけど、作り方が違いますやん。一度揚げと二度揚げやし」

「作り方？ そんなん知らんし。どうせここで食うさかいな。大将は知っとんけ？」

訊かれて大将は首を傾げる。横文字の料理はよくわからないというのが大将の言だ。

「そういや、たった揚げとから揚げも名前ちゃうんか」

男がそういう事やろ、とばかりに言う。

「竜田揚げとから揚げもちゃいますな。あれは基本的に粉がちゃいますやろ」

「チキン南蛮もやな」

「そうですな。あれも微妙にちゃいますな」

「なるほどな。そういうこっちゃか。せやけど、たいして変わらへんやし、どっちでもええわ」

「適当ですな」

元々そういう性格とわかっていても、呆れずにはいられなかった。

「うまいかしわを食うて、ビールを一気。これがたまらんわ」

それを見ながら若い男は、本人がええならそれでええか、と自分もから揚げを頬張った。

F i n o .

ややこしいややこしい～唐揚げとフライドチキン～

<http://p.booklog.jp/book/110258>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110258>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト